



(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

医師として

本多喜美
(第五福竜丸平和協会副会長)

一九八九年三月一日はビキニ米水爆実験被災三十五周年の記念日です。第五福竜丸平和協会をはじめ反核・平和の諸団体は静岡、焼津、東京、その他諸地域で記念行事を行うことでしょう。私と第五福竜丸のかかわりも三十五年になります。別に私が根気がいいという訳ではなく、多くの人々のこの船と乗組員の被災、そしてマーシャルの被ばく者への深い関心と支援が私を続けさせたのでしよう。この度、第五福竜丸平和協会副会長に御推挙戴いて身に余る責任の重さを痛感し、浅学非才、不肖の私は恐縮しながらお引受けしましたが、皆様の御役に立つようお叱りも覚悟し、三宅会長の御指導を頼りとして新しい努力をしていきたいと決意しています。

三十五年前の三月十五日のお昼のラジオニュースで焼津に帰港した第五福竜丸乗組員二十三名の被ばくによる症状と鮪の放棄を知らされ、日本国民はかつてない衝撃を受け、私の診療所にも多くの人々が訪れ様々の相談に來ま

した。そしてこの危険な核実験を何としても停止するように医師達が尽力してくれという声が上がりました。この経験を各区、各地域の医師達が同様に味わいました。遂に六月の第一土曜日の午後、日本医師会館の講堂に溢れるばかりの医師や医療関係者が集り、日本医師会から二名の代表を米大統領の下へ送る事を決議しました。然しこのことは実現しなかったのです。

私は毎日の新聞を読みながら放射性降下物の日本への降下と二十三名の被ばくの症状を出来るだけ速かに正確に世界に向けて広報すべきだと考えていました。それから日本医師会代表派遣が実現しなかったことを大変残念に思いました。然しこうした医師達の反核、平和の熱意の表明は「原水爆禁止を要望する医師の会」を生み、翌年六月放射能影響国際学術懇談会を日本で開催する事が出来ました。一方英国労働党の医師協会が広島長崎、四人の被爆者と女医を招待しまして、私もその時、先輩や先覚者のおすすめで同行しましたが

その帰途、中部ヨーロッパの戦災国を歩き、ジュネーブの世界保健機構を一九五五年五月上旬訪ねました。此処で「日本政府は広島・長崎の原爆被災者達に手厚い医療を施行して欲しい」と言われて、私は冷汗をかきました。私達は脅威に対して我が身の安全ばかり考えがちですが、身をもって教示してくれる被爆者に対して何をしたら良いでしょうかと思うと赤面、慚愧至極と大いに反省し第一回の原水爆世界大会で皆様と共に医療法と生活保障を訴えました。三年後に医療法は制定されましたが、まだ援護法が制定されないのは誠に残念です。

久保山愛吉氏は一九五四年九月二十三日、亜急性黄色肝萎縮症で逝去されましたが「私を最後の被ばく者」と遺言されたにもかかわらずその後フランスの核実験で太平洋の住民に被ばく者が発生し、又、原子力発電事故で核被害者が発生しています。キエフのチェルノブイリの原子炉事故の被ばく者達が展示館を訪問されましたが世界の核被害者を皆無にするためにこの展示館の存在はますます重要性を増して来ています。見学者の増加によって狭くなった展示館の拡張と重要な資料の散逸を防止する意味からも資料館の建設は急務と考えています。



展示館の中で表彰式

たこあげ大会盛大に 優等賞に今年も地球儀

一月十五日の成人の日、協会主催、東京都後援で第十七回新春たこあげ大会が夢の島グラウンドで開かれました。今年も地元の小中学生、団地の学童クラブ、生協のお母さんや、千葉・埼玉・神奈川から家族ぐるみで参加したおおよそ百五十名が、おもいおもしろいたこを展示館の屋根高くにあげ、盛大でした。

「平和」「核兵器をなくそう」など願いを書き込んだ四角のたこ、第五福竜丸を模した船型のたこ(残念ながらあまりありません)も、伝統的な江戸風、洋風も、焼

津の鮪風もあって、冷たい潮風のなかでのたこあげ競争。本多、齋藤理事、三井評議員が加わった六名の審査員の厳格な審査の結果、今年の優勝は江東区の、風の子会、ときまり、協賛の反核経営者の会から贈られた大きな地球儀と賞状が渡されました。参加賞や三等賞までの賞品に、出版社、友誼団体労働組合から寄贈された絵本、児童書、雑誌、カレンダーが盛り沢山に用意され、みんな大喜び。テレビ、新聞社の取材もありました。つきたてのおもちをふるまってくれた団体もあって終始にこやかな大会となり、終わって全員熱心に展示館を見学しました。

パンフレットの頒布すむ
一月から頒布がすすめられたパンフレット「第五福竜丸」「同英語版」(各百円)が好評です。展示館でも特別のボックスを作り宣伝、二百部近くを販売しました。賛助会員のみならずにもご協力をお願いをしました。多くのかたから申し込みをいただきました。静岡県の利波多美さんからは、いこいの園の園長先生・職員・在園のお年寄りにすすめたい」と五十部注

来館者まもなく 百万人に。

展示館を訪れる人々は毎年増え、昨年一年間は約十四万人、小学校の社会科見学が多く年間五六八団体に及びました。最近では休日に小グループ、また家族と一緒に来館する人が多く日曜日には三千人以上。隣に開館した熱帯植物館と共に見学する人々が多くなりました。二月五日の日曜日には反核経営者の会の見学会、浦和中学校の先生と生徒が大石又七氏を囲んで展示館で懇談するなど、にぎやかでした。展示用写真の貸し出しも増え、船体の模型ともどもあちこちの展示会に出航、しています。一月末現在の通算来館者は九八九、〇一一名。まもなく百万人を越えます。

文。その後、三・一にむけ団体の学習会でも訴えます」と百部の追加注文がありました。徳島の三好和氏からは、賛助会員の加入も一緒に訴えますと申し込みがあり、東京の浅野道風氏は新年の俳句の会で宣伝しますと五十部。小川政亮氏、小沢謙吉氏、久保佳子さん、齋藤鶴子さんからも注文がありました。千葉県のコープ生協など団体からも反響が広がっています。(お申し込みは展示館まで)。

理事・監事を選出

二月六日、学士会館で協会の第八六回理事会と評議員会が開かれました。理事会では会務報告のあと、三・一ビキニ事件記念集金の計画、来年度の活動方針、展示館の修理・拡充にかんする東京都への要請などについて審議、また、理事・評議員の充足について討議しました。つづいてひらかれた評議員会では、理事会の報告について①理事の選任②協会の活動方針について審議、理事に新たに服部学評議員を選任するとともに、現理事全員を再任しました。監事の再任も行われました。評議員については、多彩な顔ぶれが推薦され、理事会で検討していくことになりました。協会の活動についても、来館者の増加に因應する展示館の充実への一層の努力、学習会や、小中学生の見学のための先生たちとの懇談会の計画などの意見がだされました。新しく決まった理事・監事はつぎのとおり。

・理事は九名▽三宅泰雄、本多喜美、小川岩雄、川崎昭一郎、齋藤鶴子、猿橋勝子、田沼肇、沼田稲次郎、服部学。

・監事二名▽清水幹雄、松井康浩。

平和随想 (25)

三宅 泰雄

私の親友であったハリソン・ブラウン博士は一九一七年、ワイオミング州の大農の家で生まれ、母親はピアノの教師でした。彼は大学で化学を学び、ウラン同位体分離の研究で学位を得ました。この研究がシカゴ大学のシーボーグ教授の目にとまり、プルトニウム研究室の一員として招かれ、マンハッタン原爆製造計画に参加することになりました。



ハリソン・ブラウン博士

シーボーグは、原子番号九四の超ウラン元素、プルトニウムを作り、マクミラン博士とともに、一九五一年度ノーベル化学賞を受賞しました。九三番元素、ネプツニウムはマクミランによって作られたものです。ウラン(九二)が天王星(ウラヌス)にちなんで命名されていたので、新元素は順次、

海王星(ネプチューン)、冥王星(プルート)にちなんで名付けられました。

シーボーグ研究班は、その後、オークリッジ(テネシー州)に新設されたクリントン研究所に移りました。彼らが分離したプルトニウムを用い、ニュー・メキシコ州ロスアラモスで二個のプルトニウム原爆が完成し、その一個の爆発実験が、アラモゴードで行なわれました(一九四五年七月)。

原爆製造計画は、もともと、敵国ドイツを威嚇するためのものでした。しかし、すでにドイツは降伏、その同盟国、日本も氣息奄々たる状態でした。

日本に対し、原爆使用の可否を問われた指導的学者の答申は、「事は軍事に属す」という、きわめてあいまいなものでした。これにたいし、原爆使用に反対する強力な学者グループもありました。しかし、トルーマン政府と軍部はこの反対意見を無視し、広島にウラン爆弾、長崎にプルトニウム爆弾を投下し、数十万の市民を殺戮しました。

このため、マンハッタン計画に従事していた科学者の間で、大混乱を生じ、事の重大さを感じた科学者間に、討論のうずをまきおこしました。その頃、ブラウンはまだ二八才の少壮科学者でした

が、はやくもその年末に「破壊こそ我が宿命」と題する本を出しました。驚嘆に価するのは、今の世界の核軍拡の状況が、ことごとく、しかも、的確に予言されていることです。

その後、彼は核兵器に反対の同志とともに、「米科学者連盟」を結成、副会長として、「原子科学者集報」(Bulletin of the Atomic Scientists)の発刊に力を注ぎました。

一九四七年に、レオ・シラード(ハンガリーからの亡命科学者でマンハッタン計画提唱者の一人)らにより、「原子科学者非常事態委員会」がつけられ、会長はアインシュタインで、ハロルド・ユリー(一九三四年ノーベル化学賞)や、ライナス・ポーリング(一九五四年ノーベル化学賞)、ハンス・ベーター(一九六七年ノーベル物理学賞)の有力な科学者も参加しました。会の目的は、ソ連の原子科学者をまじえ、核兵器問題を主題とする常置の国際会議を組織することでした。ブラウンはシラードらの要請で、当時、ソ連の外務次官で、国連安保理事会への代表・グロムイコと再度にわたって会見し、この計画について説明しました。これが、バグウォ

ッシュ科学者会議として実現したのは、ラッセル・アインシュタイン宣言のあと、一九五五年になつてからのことでした。

ブラウンは一九五一年にカリフォルニア理工科大学(カリフォルニア)の地球化学の教授となり、そこで多くの優れた業績をあげて、米国化学賞を受賞、さらに三十七才の若さで科学アカデミー会員に推挙されました。彼は一九五四年末に、ビキニ事件の真相調査のために訪日、地球化学会の要請に応じて、特別講演をしてくれました。私はブラウンの招きで、一九五六年の秋、キャルテクの客員教授となり、数か月間、家族とともにバサディナに滞在して、さらに彼との親交を深めることができました。

ブラウンは、その後、アメリカ科学界の最高指導者となり、特に世界人口問題の危機について、世界の人々に関心を呼びかけました。なお、一九七二年には、国際学術連合会議(ICSU)の議長に任命されています。

ハリソン・ブラウンはやさしい人柄で、いつもその魅力的なまなざしで、私たちの心をなごませてくれました。その人も、惜しいことに三年前、静養先のニュー・メキシコ州アルバカーキで亡くなりました。

第五福竜丸と広島

草川 剛人

「第五福竜丸と広島」とは本校の中学3年生の社会科見学のコースと、高校1年生の宿泊研修のコースである。私の記憶によれば、一九八三年の秋から中3の社会科見学のコースに入り、毎年、最も時間をかけて見学する場所が第五福竜丸展示館である。

今年度も横田基地・憲政記念館と見学して最後に展示館を訪ねた。私たちは事前学習としてかつてNHKで放映され新日本紀行『ふるさとの証言・静岡県焼津―昭和29年』で久保山すずさんの言葉で語られる第五福竜丸被ばくの事実を学ぶ。ビデオを視てから「この船を見に行くのだ」と生徒に話すと、「放射能があるのに大丈夫ですか?」と質問される。この質問は毎年決まって出される。放射能の恐ろしさを彼ら自身の本能で嗅ぎわけるのであろう。こうして展示館の中に入ると、生徒は船の想像以上の大きさに驚く。展示館を順路に沿って進んでいくと、ビデオ

で視た福竜丸の写真、被ばく位置の地図、そして乗組員の持物、衣類、航海日誌などを見て、この船で生活した人々を知る。さらに被ばくして入院した久保山愛吉さんと御家族の間にかわされた手紙の文字や、また久保山さんを励ます人々の手紙を読むことにより、久保山さん御一家の悲しみや久保山さんの苦しみを自分のものとしてようとする人々の気持ちに触れるのである。字を習い覚えたばかりと思われる小学生から達筆な大人の手紙にまで生徒は眼を向けていく。いつもここを訪ねる時、私はこれらの手紙を生徒とともに読むのが好きである。手紙も読めるようにいくつかが開いたままにしてあるのが良い。展示館の資料の中でこれらの手紙類は、見学する人々に対して人間の心の温かさや勇気を与えてくれるのではあるまいか。もうひとつ生徒が目を見はる展示館資料に、核実験の回数を青と赤の丸い点で示す表がある。ア

メリカ・ソ連・イギリス・フランスなどの大国が軍縮条約を結びながら続けてきている核実験の回数に驚かされる。理想と現実とのギャップに憤りと幻滅のまざった気持で一歩進むと、現在のビキニ環礁の人々の写真に出会う。中でも右腕の先にのひらのない男の子がじっとこちらを見つめている一枚にひきつけられる。幻滅感に陥っていた自分の心に再び憤りがホッホツとふくれる。展示を見ていく生徒たちの顔を見ながら自分の心にも憤りが広がる。幻滅などできないでジッと見つめるのひらのない男の子の目に私たちの弱さを見すかされてしまふかのようである。

階段を昇って福竜丸の右舷に近づくとこの船の生い立ちを示す年表が目につく。一九四七年に第七事代丸として誕生したこの船が一九八八年の今日まで見てきた歴史がさりげなく書かれていく。この年表も生徒たちと話をしながら読んでいく展示品の一つである。そして後ろの船をあらためて見ると、木材のもつ耐久性に驚かされる。漁船―練習船―廃船という運命をたどった船が朽ちること

なく生きつづけているという感じを受ける。

生徒たちの感想文のテーマも最も多いのが第五福竜丸に関するものである。それほどこの船には私たちの心をとらえるものがある。私自身の心の動きも加えて生徒の受けとめ方を述べてみた。

第五福竜丸を見学した生徒たちの3分の1が高1になって宿泊研修のコースに広島を選択する。原爆ドームから平和公園附近の慰霊碑めぐり、被爆者の体験談、原爆養護ホームの訪問など、今度は自分で本を読み、テーマを決めて「核兵器」「戦争」「平和」を考える。

この意味で第五福竜丸の見学は本校の平和学習の出発点になっている。第五福竜丸が見学できる、というのに感謝してこの文の結びとします。

(東京大学教育学部附属 中・高校教員)

